

2019年8月11日～8月22日

カンボジア体験ボランティア活動記録集

～それぞれの思いが結集した11日間～



認定NPO法人

JHP・学校をつくる会
JAPAN TEAM OF YOUNG HUMAN POWER

目次

1. ボランティア活動（活動隊）の目的
2. 活動隊の歩み
3. カンボジア体験隊参加者
4. 活動スケジュール
5. 日々の活動報告
6. 参加者感想文
7. 活動への支援団体

1. ボランティア活動（活動隊）の目的

JHPでは1993年に、「日本の若い世代への地球市民教育」を目的として、大学生を中心とするカンボジア活動隊（通称：活動隊）を派遣してきました。主な活動は、学校での遊具ブランコ建設や文具寄贈そして学校贈呈式への参加、地元小学校・児童養護施設（CCH）の子ども達との交流、JHPプロジェクト視察、NGO施設訪問など多岐にわたります。これまでに、延べ1,200名を超えるボランティアがJHPの一員としてカンボジアに渡り、炎天下での活動に汗を流してきました。2017年度からは、より多くの世代の方に、JHPがカンボジアでボランティア派遣を行う理由を知っていただき、「人とのつながりの大切さを認識」「子どもたちと喜びを共有」「カンボジア歴史・風土文化などを肌で感じる」「国境の壁、人種、民族の違いなどを越えて、広く地球的視野が持てる人材が育つ」場として、“カンボジア体験ボランティア”に切り替えました。16歳以上（性別問わず・親子参加可）と幅広い世代を対象とし、約10日間の日程で体験いただけるボランティア活動となっています。この記録集では、活動に参加した皆さんが、カンボジアで体験した、見て・聞いて・感じたこと・をお伝えします。

カンボジア王国 Kingdom of Cambodia

- ・国名 カンボジア王国
- ・首都 プノンペン 人口：約200万人
- ・公用語 クメール語
- ・面積 18.1万Km² 日本国土の約半分
- ・人口 1,510万人 20歳以下人口46%
- ・宗教 90%が上座部仏教、ほかイスラム教、カトリック
- ・通貨 リエル(R) 4000≒US(\$)1
- ・政治 立憲君主制



立憲君主制の民主主義国家であるカンボジア王国は、人口約1,510万人で、90%のクメール人の他、中国系、ベトナム系、チャム族などの少数民族で構成されています。9～15世紀がカンボジア王国「アンコール時代」で、アンコール・ワットやアンコール・トムなどの世界的な遺跡が建設されました。しかし次第に勢力が衰えると隣国の侵略を受け領土を縮小し、1887年にフランスの植民地化。1953年にカンボジア王国としてフランスから独立した後、しばらくは安定した王政国家が続きますが、クーデターが1970年に勃発、以後内戦状態となります。1975年ポル・ポト政権の誕生により内戦は終結。しかし、ポル・ポトの恐怖政治により100万人以上が死亡する悲惨な時代となりました。1979年ベトナムの支援を受けたヘン・サムリン政権誕生後も国内の混乱は続き、1993年パリ協定に基づきUNTAC（国連カンボジア暫定統治機構）が総選挙を実施。シハヌーク国王が即位しました。ポル・ポト時代に大量の教員や、高等教育を受けた人々が殺され、ほとんどの教育施設が閉鎖されたことにより、カンボジアの教育制度は崩壊。国の復興にとって教育は最も重要な課題のひとつとなっています。

2. 活動隊の歩み

カンボジア活動隊以外に、小山内美江子 国際ボランティア・カレッジ受講生やスタディーツアー参加者など多くのJHPメンバーがカンボジアで活動しています。

◆実施回数：47回 ◆参加者数：1,220名（内学生960名）

◆活動期間：10日～30日 ◆活動時期：3月 5月 8月 12月（2015年より8月のみ）

1993年 1回	1994年 3回	1995年 2回	1996年 3回	1997年 4回	1998年 1回	1999年 2回
・贈呈式 ・遊具作り など	・贈呈式 ・遊具作り など	・贈呈式 ・遊具作り など	・贈呈式 ・遊具作り など	・贈呈式 ・遊具作り ・水害被災 地支援など	・校舎補修 ・遊具作り など	・贈呈式 ・遊具作り ・文具寄贈 など

2000年 2回	2001年 2回	2002年 2回	2003年 2回	2004年 2回	2005年 2回	2006年 2回
・贈呈式 ・遊具作り ・文具寄贈 など	・贈呈式 ・遊具作り ・文具寄贈 ・スラム街 火災被災地 支援など	・贈呈式 ・遊具作り ・文具寄贈 など	・贈呈式 ・遊具作り ・文具寄贈 など	・贈呈式 ・遊具作り ・文具寄贈 など	・贈呈式 ・遊具作り ・文具寄贈 など	・贈呈式 ・遊具作り ・文具寄贈 など

2007年 1回	2008年 1回	2009年 2回	2010年 2回	2011年 1回	2012年 2回	2013年 2回
・贈呈式 ・遊具作り ・文具寄贈 など	・贈呈式 ・遊具作り ・文具寄贈 など	・贈呈式 ・遊具作り ・文具寄贈 など	・贈呈式 ・遊具作り ・文具寄贈 など	・贈呈式 ・遊具作り ・文具寄贈 など	・贈呈式 ・遊具作り ・文具寄贈 など	・贈呈式 ・遊具作り ・文具寄贈 など

2014年 2回	2015年 1回	2016年 0回	2017年 1回	2018年 1回	2019年 1回	
・贈呈式 ・遊具作り ・文具寄贈 など	・贈呈式 ・遊具作り ・文具寄贈 など	・未実施	・校舎補修 ・遊具作り ・文具寄贈 ・現地大学 生交流など	・贈呈式 ・校舎補修 ・遊具作り ・文具寄贈 ・現地大学 生交流など	・贈呈式 ・校舎補修 ・遊具作り ・子どもた ちとの交流 ・フィール ドワーク など	

3. カンボジア体験隊参加者



参加者名

- ・磯山 こはる（品川女子学院高等部1年）
- ・大森 由真（品川女子学院高等部1年）
- ・増永 和佳（品川女子学院高等部1年）
- ・中村 咲里佳（中央大学杉並高等学校3年）
- ・梅澤 由羽（法政大学3年）
- ・杉本 宗里（法政大学2年）
- ・チョウドリー サラ（法政大学1年）
- ・山森 菜々子（法政大学1年）
- ・西村 裕美（法政大学1年）
- ・木村 綾乃（立教大学3年）
- ・長島 純子（立教大学2年）
- ・宮本 実佑（立教大学2年）
- ・佐藤 花凜（立教大学1年）
- ・棚木 はるか（立教大学1年）
- ・荒木 はな（専修大学1年）
- ・川嶋 由希香（弘前大学1年）
- ・榊原 宏（社会人）
- ・小又 利晴（社会人）
- ・菊池 透（社会人）
- ・村松 菜緒子（社会人）
- ・鈴木 直志（活動サポーター）
- ・北村 巖（活動サポーター）
- ・和田 勝則（JHP事務局）
- ・綿貫 玲子（JHP事務局）
- ・眞榮城 好香（JHP事務局）

4. 活動スケジュール

・期間：2019年8月11日～22日

- ・活動目的：①学校の校庭に木製ブランコの建設
 ②校舎の外壁及び教室内のペンキ塗り
 ③JHP活動見学（アートプロジェクト、学校贈呈式）
 ④学校及び児童養護施設（CCH）で子ども達との交流
 ⑤JICA訪問、プノンペン市内やその近郊見学（キリングフィールド等）

日程	活動内容
1日目（8/11 日）	午前成田空港出発⇒午後プノンペン空港到着 <プノンペン泊>
2日目（8/12 月）	JHPの活動説明会⇒サクラ倉庫⇒スワイリエンへ移動 <スワイリエン泊>
3日目（8/13 火）	ルッセイプレイ小学校にてブランコ建設作業 <スワイリエン泊>
4日目（8/14 水）	ルッセイプレイ小学校にてブランコ建設作業⇒校舎内外ペンキ塗り作業 <スワイリエン泊>
5日目（8/15 木）	ルッセイプレイ小学校にてブランコ贈呈式⇒子ども達と交流（日本文化紹介）⇒校舎内外ペンキ塗り作業 <スワイリエン泊>
6日目（8/16 金）	ブレイトロー小学校にて学校贈呈式に参加⇒パフォーマンス披露⇒プノンペンへ移動 <プノンペン泊>
7日目（8/17 土）	トゥール・スレン、キリングフィールド見学⇒カンボジアリビングアーツのワークショップ参加+鑑賞 <プノンペン泊>
8日目（8/18 日）	フィールドワーク <プノンペン泊>
9日目（8/19 月）	ローカルスタッフとのワークショップ⇒JICA・NGOプラザ訪問 <プノンペン泊>
10日目（8/20 火）	CCH訪問（アートプロジェクト参加、カレーパーティー） <プノンペン泊>
11日目～12日目 （8/21水～22木）	サクラ倉庫で作業⇒自由時間（セントラルマーケット・イオンモールなど）⇒JHPプノンペン事務所スタッフとの夕食会⇒プノンペン空港⇒早朝成田空港到着

5. 日々の活動報告

8月11日（日）

成田空港に集合し、6時間ほど飛行機に乗り、現地時間 15 時頃に、プノンペン空港に無事到着しました。その後、プノンペン市内にあるホテルに移動し、徒歩圏内にあるオシャレなレストランで食事をしました。帰りにスーパーマーケットにも寄り、現地の雰囲気を堪能できました。（山森）



（出発前、成田空港にて）



（ウェルカムトゥーカンボジア）

■『今日のありがとうございます！』 ～1日を通して感じた感謝の想い～

「色々な運転手さん、ありがとう！」（宮本）

■第1日目の感想

今日はカンボジア初日でした。最初の空港に行く時からドキドキしていましたが、無事にカンボジアに着き、ホテルもとってもきれいで、カンボジア料理も美味しくて、帰りにスーパーマーケットにも寄り、カンボジアの雰囲気を1日目にしてたくさん感じる事ができました！明日からも、とても楽しみです！（長島）

8月12日（月）

午前中は、宿泊したホテルにて JHP 事務所の現地スタッフとの顔合わせと事業内容の共有を受けました。その後サクラ倉庫に移動し、ブランコの資材をトラックに積み込みました。昼食後はプノンペンからバスで4時間ほどかけてスワイリエンに移動し、明日から活動する学校に立ち寄りしました。夕食後は各自、明日以降の活動に備えます。（川嶋）



（現地スタッフと活動隊、お互いに自己紹介）



（ブランコ資材の積み込み）

■『今日のありがとうございます！』

「小学校の方々、ブランコの資材をトラックから降ろしてくださりありがとうございました。明日からブランコ作り、頑張ります！」（増永）

■第2日目の感想

今日はプノンペンからスワイリエンまで移動しました！バスの中で中々コミュニケーションが取れず緊張しましたが、時間が経つにつれて、沢山の会話が生まれるようになり、1日目よりさらに仲が深まりました。明日からの活動が更に楽しくなりそうです！明日から頑張るぞ！（杉本）

8月13日（火）

今日は、ブランコの贈呈式の際に披露するソーラン節と歌の練習をした後、ブランコ建設をしました。一日中暑い中での活動でしたが、お昼ご飯にカレーライスを食べ活動終了後、ホテルに帰り人生初のスクールを体験した人たちもいます。明日もハードな活動になると思いますが、その中で1つでも多くの新しいことを環境や仲間から学べたらいいなと思います。（西村）



(土台作り)



(ブランコのペンキ塗り)



(コンクリート作り)



(ソーラン節の練習)

■『今日のありがとうございます！』

「お昼ご飯に、関東給食会様とニチレイ様が寄贈してくださったカレーを食べました。美味しく頂きました。ありがとうございました。」



(いただいたカレーを美味しくいただきました)

■第3日目の感想

今日は小学校へ赴き、分担してブランコのペンキ塗り、土台の穴掘り、などの基礎作りをしました。初めて作業する方が多かった中でもみんなめげずに笑顔で元気いっぱい準備に取り組んでいました。今日から活動サポーターの北村さん、鈴木さんと JHP 広報の眞榮城さんが合流されたので、スムーズに作業も進めることができました。現地の方々とも今日の作業のおかげでより仲良くなれたと思いました。(チョウドリー、磯山)

8月14日(水)

今日は小学校にてブランコ作りを行い、その後、校舎窓のペンキ塗りを分担して行いました。ブランコ作りは電動ドリルが動かなくなるハプニングもあり、時間が押ししてしまいましたが、臨機応変に役割分担をしながら作業することができ、無事ブランコが完成しました。夕食後には、第一回ミーティングを行い、皆で4日間の振り返りをしました。それぞれ感じていることをシェアすることができ、今後の活動に繋がる有意義な時間になりました。明日のブランコ贈呈式では、準備してきたソーラン節や歌を届け、楽しみにしていた子どもたちとの交流もあります。各班協力してレクリエーションの準備を行い、子ども達が楽しんでもらえるよう、創意工夫しました。(木村)



(真剣な眼差しで電動ドリルを使っでの作業)



(みんなで協力して立ち上げたブランコ)

■『今日のありがとうございます!』

「日東ベスト様より寄贈していただいた、肉じゃがとおでんのお昼を美味しく頂きました。ありがとうございます。また学校の方からバナナやドーナツをいただき、ありがとうございます。」(荒木)



(肉じゃが、おでん。どちらも美味しかったです!)



(全員で円陣を組み、気合チャージ!)

■第4日目の感想

今日はブランコの完成まで行いました。途中でエンジンがつかなくなるなどのトラブルがありましたが、今日ペンキを塗った資材を組み立てて、立ち上げることができました。予定より時間がかかりましたが、無事に完成させることができてよかったです。同時並行で校舎の清掃とペンキの塗装をしました。ペンキで塗装する機会はなかなかないので、難しいところがありましたが途中までできたので、明日続きをさらに上手に塗って終わらせられるように頑張ります。(大森)



(ブランコ建設前の土台となる穴の前で)



(校舎窓の汚れを落とし、ペンキ塗りをしました)

8月15日(木)

今日は、昨日で完成したブランコの仕上げをして、学校に寄贈しました。その後、学校の子どもたちと、日本から用意してきた、さかな釣りや紙鉄砲などで交流し、楽しみました。午後は、壁のペンキ塗りの続きを完成させ、学校がより綺麗になりました。夕食前の自由時間には、ホテル周辺の散策を楽しんだ人もいます。夕食後は、明日の学校贈呈式の式典やフィールドワークについてのミーティングを行いました。その後、式典で披露するソーラン節の練習をみんなで集まって行い、最終確認をしました。明日6日目は、学校贈呈式の式典があり、そこで日本の文化を披露します。(山森)



(最後の記念プレート取り付け作業)



(ブランコ完成)



(子どもたちと一緒に紙鉄砲を作りました)



(ソーラン節披露)

■『今日のありがとうございます!』

「ブランコの建設にご支援いただいた JKA 様、JHP の支援者様。本日、ルッセイプレイ学校にブランコの贈呈式を行いました。贈呈式が終わり次第、すぐに子どもたちがブランコに乗っている姿を見て、私たち 2019 年 8 月隊も、2 日間炎天下で作業した甲斐があったと思いました! ありがとうございます!」(梅澤)

■第5日目の感想

5日目は、ブランコ贈呈式と校舎の塗装作業をしました。朝、学校へ着くと、子ども達が贈呈式に先駆けて、建てたブランコに本当に楽しそうな笑顔で乗っていました。それを見て、「子ども達のためにブランコを作る」という目標を持って、この2日間地道な作業をしてきて本当に良かったと感じました。作業から贈呈式までの工程を通して、辛さや嬉しさなど様々な気持ちになり、「達成感」と、これが「ボランティア支援」ということなんだと身をもって感じました。最後にブランコのそばでみんなで乾杯をした後のジュースは最高に美味しかったです。夜のソーラン節練習では、皆が本気でソーラン節に取り組むことができました。みんなの心が一つになって2019年8月隊でしかできないソーラン節が完成しました。贈呈式で練習の成果をしっかり発揮したいです。(中村)



(ブランコ贈呈の記念写真)



(完成したブランコに乗り、喜ぶ子どもたち)

8月16日(金)

午前中はプレイトロー小学校の贈呈式に参加しました。子どもたちをはじめ、保護者の方、地域の方およそ350人が集まりました。ソーラン節と歌と演奏のパフォーマンスでは、昨日の夜の練習の成果もあり、子どもたちも一緒に楽しんでくれました。その後、テープカットや記帳、サクラの植樹などを行いました。子どもたちとも、たくさん触れ合うことができ、貴重な時間となりました。地域の方が用意してくださったご飯もとても美味しかったです。スイリエンからプノンペンに戻る際には、日本のODAで架けられたメコン川にかかるつばさ橋にも立ち寄りしました。サクラ倉庫で荷物を下ろしたあとは、4日ぶりにプノンペンに戻りました。夕食はカンボジアに来て初めてピザを食べました。久しぶりに洋食を食べ、少し日本が恋しくなりました。(川嶋)



(贈呈式の様子)



(子どもたちも一緒に歌を歌ってくれました)

■『今日のありがとうございます!』

「今日は貴重な校舎寄贈の式典に参加させていただきました。学校の皆さま、地域の皆さま、生徒の皆さん、歓迎してくださり、私たちの拙いパフォーマンスにも温かい拍手をくださり、豪華な食事を準備してくださり、ありがとうございます。そして子どもたちの笑顔に出会わせてくださった校舎寄贈のサンテクレール様、ありがとうございます。」(村松)



(サクラの植樹)



(寄贈された校舎の前で記念写真！)

■第6日目の感想

今日は、小学校の贈呈式に参加しました。入場する際にいただいた、カンボジアの伝統的な手織布クロマーは、人それぞれカラフルな色合いでとても素敵でした。贈呈式で披露したソーラン節と歌のパフォーマンスは、とても良い発表になったと思います。3日間という短い時間のなかで、朝の時間や、ホテルに帰ってからの時間を使ってみんなで協力して練習できたことも、いい思い出だと思います。そのあとの子どもたちが披露してくれた踊りと歌のパフォーマンスも、とても素敵でした。最後に交流の時間もあり、子どもたちと抱き合ったり写真を撮ったり、みんなそれぞれ楽しんでいて良かったです。プノンペンに帰ってきて食べたピザは、とても美味しかったです。(佐藤)

8月17日(土)

午前中には、トゥール・スレン収容所とキリングフィールドに行きました。ポル・ポト時代がどれだけ悲惨だったか分かったとともに、このようなことが二度と世界で起こってはいけないと感じました。その後、去年と一昨年8月隊が建設したブランコを見に行きました。自分たちが作ったブランコも、こうやってみんなが遊んでくれるのだらうと思うと嬉しくなりました。午後には、カンボジアリビングアーツのワークショップで、カンボジアの踊りを学びました。その際、3メートルもある大きな布を衣装のように足に巻きました。踊りは難しかったですが、動きにストーリーがあり、とても興味深く、みんな楽しんで体を動かしました。夕飯後には、ワークショップで私たちもレクチャーしてもらった踊りのステージを見ました。鮮やかな衣装や楽器での生演奏、掛け声や踊りは大迫力でした。とても充実した1日でした。しっかり寝て、明日のフィールドワークに備えます。(西村)



(カンボジアの伝統的な踊りを体験しました！)

■『今日のありがとうございます！』

「ガイドさん、1日中ためになる色々な話や、案内をしてくださってありがとうございました。」
(チョウドリー)



(ダンスショーを鑑賞)



(昨年と一昨日の8月隊が建てたブランコの前で)

■第7日目の感想

午前中はトゥール・スレン収容所とキリングフィールドに行きました。ポル・ポト時代に行われていたことを目の当たりにしました。本の中で見ていたものが目の前に、そして生々しく存在していました。当時の収容所で生き残り、生還された数少ない方とお会いし、この歴史がまだ最近のことなのだと思えました。その後、一昨年と昨年の8月隊が建てたブランコを見に行きました。休日でもあり、学校に子ども達はいなかったのですが、ブランコがとても使われている様子が見えて、私たちが建てたブランコも沢山使われたらいいなと思いました。カンボジアン・リビング・アーツでは、カンボジアの伝統的な踊りを体験しました。その夜の帰りには、ビル群や巨大モニターで街がとてもきらびやかで、今まで見ていた風景との違いを感じ、びっくりしました。(磯山)

8月18日(日)

本日は、JHPの初めての試みとなる、フィールドワークを行いました。学生が主体となって各グループで決めたテーマに基づき、対象となる現地を調査しました。35度にもなる気温の中、調査地まではドライバーに連れていってもらいましたが、そこからは通訳も帯同せず、チームの力だけで調査をしました。前日まではプログラムに沿って効率的に有意義な活動をしてきましたが、今回の活動は全くの未知。どのような結果になるか、それぞれのチームが戻ってくるまで不安もありましたが、全チームとも、無事に時間通り終えて戻ることができました。事前の準備と、実際に隊員自らが経験や見聞することで、本やインターネットでは知りえない肌感覚に残る体験ができたと思います。また、本日は、報告会の後、8月に誕生日を迎える隊員2名(山森さん・棚木さん)のサプライズ・バースデーパーティーを行いました。また、昨年の活動隊OBの井上明彦くんがラオスを経由してカンボジアに来てくれました!(小又)

■『今日のありがとうございます!』

「各ドライバーさん、我々のフィールドワークにお付き合いいただき、ありがとうございました。」
(菊池)

■各グループの感想

《Group 1》 テーマ：異文化

梅澤、小又、川嶋、木村、増永

今回初めての試みでもある“フィールドワーク”では、学生の意見を参考に提案し実現された活動だったので、準備では試行錯誤もありましたが、「百聞は一見に如かず」という言葉があるように、簡単に物事を調べられる世の中だからこそ、机上の知識ではなく実体験を通して得たものの重要性を学ぶことができました。(梅澤)



(決めポーズ!)

《Group 2》 テーマ:建造物

西村、長島、荒木、磯山、村松、鈴木
私たちは、建造物をテーマに、王宮、プノンペン大学、JHP 事務所を周りました。運転手の方が英語を話せないこともあり、不安あるスタートでしたが、予め話すことを書き出しておいたり、コミュニケーションを積極的に取ることでスムーズに移動を行うことができました。バスではなく、自分たちの足で街を歩くことで見えることや気付けることが多く、貴重な経験でした。(荒木)



(王宮前で)

《Group 3》 テーマ:食

山森、中村、チョウドリー、佐藤、菊池、北村
私たちは、食というテーマで4つマーケットを周りました。実際に訪れてみると、床に座って売るのが普通で、その場で魚の解体や肉の全ての部位を販売していました。日本でいうスーパーマーケットのように、マーケットには地元の方も多く、観光客に対して冷たく対応する人も中にはいました。一方で、笑顔であったり、日本語で少し話してくれた人もいました。マーケットを周る中で日本の衛生面の徹底さを感じました。(中村)



(マーケット探索中)

《Group 4》 テーマ:物価

杉本、宮本、棚木、大森、榊原
私たちは「物価」をテーマに、ロイヤル大学、ボンケンコンエリアに行きました。現地大学に通う学生にインタビューをしてみて、大学の学費が大体一年間で500～1000ドルということを知ることができました。ボンケンコンエリアでは、衛生面、治安面、物価面共に日本とほとんど変わらない光景が見られました。事前にスリが多発していると聞いていたため、緊張感がありましたが、実際はとても良い雰囲気でした。(宮本)



(プノンペン大学の学生にインタビュー)

■第8日目の感想

フィールドワークを通じて、ネット上の不確かな情報だけでなく、自分の目で見て感じたことを全員でシェアすることで、カンボジアについての知識が広がり、帰国後もワールドワイドな視点で物事を考えられるようになると思います。準備の負担や不安は大きいフィールドワークでしたが、各グループが今後活かせる充実した時間を過ごせ、安心するとともに、やってよかったと思いました。貴重な経験をありがとうございました！(木村)



(フィールドワーク報告会の様子)



(パーティーに昨年のOBがサプライズ参加)

8月19日（月）

午前中は、現地の JHP 職員の方達とミーティングを行いました。カンボジアの教育についての話を聞き、自分たちにできることはないか、ディスカッションしながら考えたり、JHP のプロジェクトである「教科書・指導案作成」の際に行っている、小学2年生向けの模擬授業の体験も行いました。また、明日の CCH 訪問に備え、現地の子どもたちがやっている遊びを教えてもらい、楽しく実践もしました。昼食は、カンボジアの無農薬の食材を使用している食堂に食べに行きました。午後は、JICA カンボジア事務所を訪問し、カンボジアについて学ぶ有意義な時間を過ごせました。その帰りには、クラタペーパーに行き、創業者の倉田浩伸さんご自身のカンボジアでの体験談や JHP との繋がりについて聞かせていただきました。最後にマーケットにも寄り、カンボジアならではの雰囲気味わうことができました。（山森）

■『今日のありがとうございます！』

「JICA カンボジア事務所の外山さん、貴重な時間を頂き、カンボジアへの色々な支援について説明ありがとうございます。また各 NGO の情報を見て個人的にも支援し続けたいと思います。」（鈴木）

■第9日目の感想

今日は、明日の CCH の子どもたちと遊ぶゲームの練習をしたり、JHP のローカルスタッフの皆さんによる模擬授業で、実際に小学2年生の立場にたって絵を描いてみたり、とても楽しかったです。午後は、JICA カンボジア事務所を訪問して、とても貴重なお話を聞くことができました。昼食と夕食では、カンボジア料理を食べましたが、ご飯も美味しく、充実した1日を過ごすことができました。（長島）



(グループディスカッションと英語での発表)



(模擬授業の体験)



(JHP の活動紹介タペストリーの前で)



(JICA NGO プラザ訪問)

8月20日（火）

今日は CCH に行き、現地の子どもたちと交流をしました。午前中は高学年の子どもたちと、カンボジアの伝統の遊びをしました。隊員と子どもたちが混合でチームを作り、子どもたちに教えてもらいながら遊びました。そのあとは、室内で折り紙やチラシで工作をしたり、歌を歌ったりと思い思いに過ごしました。カレー作りも並行して行い、みんなで並んでお昼ごはんを食べました。午後は、子どもたちが歓迎の踊りを披露してくれました。その1つにソーラン節があったため、私たちからも贈呈式で行ったソーラン節を披露しました。その後、グループに分かれて一緒にソーラン節を練習し、最後にグループごとに発表しました。短時間の練習でしたが、教え合うことでグッと距離が縮まりまし

た。帰るときには子どもたちがTシャツに名前を書いてくれ、最後まで手を振って見送ってくれました。たくさん子どもたちと笑顔の時間を過ごすことができ、とても素敵な時間となりました。夕食後はミーティングを行い、これまでの活動を振り返りました。それぞれがこの活動を通じて感じたことを共有しました。明日はいよいよ最終日です。良い締めくくりとなるよう怪我には気をつけて過ごしたいと思います。(川嶋)

*CCH (Center for Children's Happiness) : 幸せの子どもの家

2002年にJHPが創設した児童養護施設。現在はローカルNGOの資格を取得、運営支援を行っている。



(CCHの子どもたちによる歓迎の踊り)



(カレー作り)

■『今日のありがとうございます!』

CCH 訪問途中、悪路がありましたが、ドライバーさんが搭乗者の身になり丁寧に運転をしてくれてありがとうございました。CCHの皆さん、私たちを笑顔で迎えてくれてありがとうございました。(榊原)



(ローカルゲームの様子①)



(ローカルゲームの様子② 皆言語を超えて楽しめました!)



■第10日目の感想

今日はCCHを訪問して、子どもたちと交流しました。午前中は、私は室内で5・6人の子どもたちとカレー作りをしていたのですが、外からは昨日のワークショップで教わった遊びを子どもたちと楽しん

でいる賑やかな声が聞こえました。その後は室内で折り紙をしたり、楽器に合わせて歌を歌ったりしました。子どもたちが折り紙を折るのが上手で、私たちも折れないようなものを作っていたのは、とても驚きました。カエルの歌などを日本語で歌っていたのも、驚いたしとても嬉しかったです。みんなでカレーを食べたあとは、グループに分かれてソーラン節を練習しました。とても疲れたけど、子どもたちが楽しんでくれていて良かったです。子どもたちがまた来てね、と言ってくれたのも印象的で、できるならいつかまた訪問したいと思いました。（棚木）



(カレーパーティー！)



(屋内での交流)



(ソーラン節で交流)

8月21日（水）

今日は朝早く起き、JHP が支援いただいた物資を保管している「サクラ倉庫」に、江東区海外リサイクル支援事業によって集められた、小中学校の中古の机と椅子・鍵盤ハーモニカが届き、みんなで運び入れました。毎年現地のスタッフだけで行っていた作業ですが、私たち8月隊のメンバーも一緒に全員で協力して行くと、あっという間に作業を終えることができました。その後は、イオンとローカルマーケットで買い物をしました。日本の店舗にとっても似ているイオンと、現地の雰囲気が色濃いローカルマーケットは対照的で、とても勉強になりました。夜ご飯は、現地スタッフの方々と最後の食事でした。言葉が通じなくても、こんなにも深く繋がれる関係は素敵だと感じました。お別れは寂しかったですが、また会えるのを楽しみにしています。（西村）



(江東区で集められた中古の机・椅子などを皆で協力して倉庫に運びました！)

■今日のありがとうございます！』

「JHP 職員の和田さん、綿貫さん、いつも私たちをサポートしてくれてありがとうございました！」
「ドライバーさん、10日間運転してくださってありがとうございました！」 (チョウドリー)

■最終日の感想

JHP のサクラ倉庫で、江東区の小中学校から送られてきた中古の机・椅子、鍵盤ハーモニカを運びました。とても暑かったですが、全員で協力すると、作業を早く終わることができました。2019年8月隊の最後の活動だったので、とても達成感がありました。夕食は現地スタッフの方たちと一緒に食べました。関わってくださった現地のスタッフ、ドライバーさんとの最後の交流だったので、とても寂しかったです。そして10日間ありがとうございました。(磯山)



(現地スタッフと一緒に最後の夕食)



(ブノンペン空港にて)

■10日間の体験ボランティアが無事に終了し、全員が無事に帰国しました！

22日早朝には、2019年8月隊の20名全員が成田空港に到着、無事に帰国しました！約10日間のカンボジア体験ボランティアを通じて、全員が普段経験することのできない、沢山の人生の学びがありました。ぜひ今回の体験ボランティアでの実体験、そして「カンボジアの今」を多くの人に伝えていきたいです！

6. 参加者感想文

<高校生4名>

・磯山こはる・大森由真・増永和佳・中村咲里佳

<大学生12名>

・梅澤由羽・杉本宗里・チョウドリーサラ・山森菜々子・西村裕美・木村綾乃

・長島純子・宮本実佑・佐藤花凜・棚木はるか・荒木はな・川嶋由希香

<社会人6名>

・榎原宏・小又利晴・菊池透・村松菜緒子・鈴木直志・北村巖





初めて行ったカンボジア

所属 品川女子学院高等部 1年

氏名 磯山 こはる

私が入ってる部活が今年からカンボジアにある学校を支援することになり 1度自分の目でカンボジアの現状を見ておきたいと思いこちらの隊に参加しました。まずはスワイリエンにブランコを作りに行かせていただきました。作りに行った先の学校の子どもたちがとても元気で可愛かったです。ブランコ作りはとても大変で大人や男の人の力を借りないと難しかったです。そして道は意外と整備されていました。ですがご飯にありがいたり、識字率の低さに驚きました。私が想像していたカンボジアにとっても近い現状でした。次にプノンペンで観光や JICA、CCH（児童養護施設）に訪問しました。プノンペンでトゥール・スレン収容所やキリングフィールドなどを見ました。跡がとても生々しく残っており内戦が全然最近の事のように感じました。そしてそれらの場所が居住地と隣接していることに驚きました。リビングアーツでは、なくなってしまっていた伝統文化を守ろうとしていてそこでも内戦の影響を感じました。帰る時が夜だったのですが街がとてもキラキラで、多分中国の大型ビジョンなどがあり最初に見ていたスワイリエンとの違いに驚きました。中国語が書いてあるビルなどもたくさんありました。マーケットにも行ったのですが、スーパーコピー商品があったり、全然値切ることが出来なかったりとカンボジアが豊かになっているのだなと思いました。CCH は大きい子は英語がある程度話せ、小さい子でも少しは話していて驚きました。とても元気で可愛く、ソーラン節を教えたのですが、私たちが何日もかけてやったものをものの数分で覚えすごいと思いました。子どもに鉛筆削りを強請られました。鉛筆削りを一人の子にあげたらそれを見ていた子が手を伸ばしてきました。1個しかなかったのでその子には渡すことはできませんでしたが、鉛筆削りも買えないほど家計がひどいのだと思いました。カンボジアはまだまだ格差がある発展途上国だと思います。都市部はとてもキラキラですが、地方に行くとまだ学校に行けていない子も多く、進学率が低いと思いました。場所によってすごい格差があることを感じ、2つの地域を見るだけではわかった気になってはいけないなと思いました。なので自分の学校が支援している小学校がある地域も見てみたいなと思いました。



初めてのカンボジア

所属 品川女子学院高等部 1年

氏名 大森 由真

私が所属している部活がボランティアをする部活なので、カンボジアでボランティアができる機会なんてなかなかないなと思い参加させていただきました。そして、実際にカンボジアでブランコを建て、トゥール・スレン、キリングフィールド見学、フィールドワークなど様々な経験をさせていただき本当に充実した10日間でした。そしてカンボジアには様々な問題があることも知りました。特に教育面では、実際に学校を訪れトイレなどの衛生面、データで進学率の低さを知りました。大人でも文字が読めない人がいたりなどポル・ポト時代の影響があるなと感じました。CCH（児童養護施設）にも行って見て、子ども達がとても積極的に話しかけてくれたりと、生き生きした様子を見てこんなにいい子がたくさんいるんだ！と少しずつでもカンボジアの教育が改善されるといいなと思いました。生活、活動する中で、触れ合う機会のない社会人や大学生の方と過ごすのはとても新鮮で楽しかったです。しかし、人見知りというのもあり、なかなか慣れることができず泣いてしまったこともありましたが、皆さんの優しさに本当に助けられました。この10日間を振り返ってみてとても充実した毎日でした。参加することができてとても楽しかったです。



カンボジアを知る

所属 品川女子学院高等部 1年

氏名 増永 和佳

実際にカンボジアに来る前は小学校の様子を見たいという思いが強かったがこのプログラムでカンボジアの食、異文化、歴史、人柄、治安、言語、学校、習慣などの事情を一気に知って、体験して、考えることができた。特に思いが強く残ったのが CCH（児童養護施設）での活動。カンボジアの小学校は寂しい雰囲気という偏見があったが今回の交流でむしろ日本の学校よりも生徒や先生からのパワーを感じた。また、様々な活動をしてい



くあたりその街の歴史や習慣を知って初めて人々に密接に関わり交流することができることを感じた。CCH は最後の私たちの活動だったがカンボジアに来て初めての活動が CCH だったら得られたものも少なかったと思う。今回の活動を通してボランティアをする上でその街の歴史や習慣を知っておくことの重要性を学んだ。カンボジアでこんな経験をした、で終わらせるのではなく、カンボジアでこんな経験をしてこう考えたからこうしていきたいという思いを持ってこの貴重な経験をこれからの生活に活かして行けるようにしたい。

「幸せとは何か」「文化とは何か」について考えた 11 日間

所属 中央大学杉並高等学校 3 年

氏名 中村 咲里佳

11 日間過ごして、私は沢山の“笑顔”に出会いました。それは日本では感じる事のない“笑顔”でした。その“笑顔”から私は“幸せ”ってなんだろうと感じました。カンボジアの人は不便なことが多いかもしれないがお昼になると芝生でご飯を食べたり、王宮が休みの前になると王宮の前でゆっくりした時間を過ごしていました。私はカンボジアの生活は穏やかだなと感じました。“笑顔”から様々なことを感じました。私は“幸せ”って環境も大事だけどそうではないことを実感しました。今までは感じなかった「文化」と



という言葉の重みを感じました。カンボジアの伝統的な踊りを教わった際に教えてくれた方々は「カンボジアの文化である踊りを失くしたくない、もっと世界に広げたい」と様々な活動をしているという話をしてくれました。また、CCH の子達がソーラン節を披露してくれたことがとても印象に残っています。日本の文化であるソーラン節をカンボジアの子ども達が踊ってくれたことは本当に嬉しかったです。その後ソーラン節を日本人とカンボジアの子たちと一緒に汗をかきながら踊りました。日本ではおなじみのダンスですが、それが世界に出るとこの「ソーラン節」と言うものは「日本の文化」というものになり、「ソーラン節」これが日本の個性なんだと思いました。気付いた時は、「文化ってすごい！」と率直に思いました。「文化」は本当に国にとっての個性であり、無くしてはいけないもの、この言葉の意味を深く理解することができました。最後に、こんなにも貴重な経験をさせていただいた JHP のスタッフの皆さん本当にありがとうございました。

感情

所属 法政大学3年
氏名 梅澤 由羽

今回で2回目、2年ぶりとなるカンボジアの地で経験したことを通して何度も感情が揺さぶられた。日本という、生きていく環境が整いすぎてしまっている素晴らしい国で日々を過ごしている自分にとって、その“あたりまえ”の地から1歩踏み出して外の世界に触れられた時間はとても刺激的だった。日本人の性格として多くの人が、人と関わる時に自分の感情を押し殺すことがある。自分から言わせたら主体性が全くない。でもカンボジアの人は



違う。“個”としての存在が非常に力を持っていると思った。時代背景が全く違う2つの国の人々が関わった10日間で、今のあたりまえの幸せを感じきれずに、文句ばかり残す日本人より、今生きている環境に文句を言わず、今ある環境の中で幸せを見つけ出すカンボジア人に感銘を受けた。半年後から世界一周をバックパック1つで旅をする。その時にまたこの地に戻ってきたい。最後に、今回のカンボジア体験ボランティアの活動を支えていただいた全ての方々に感謝申し上げます。

ps. 隊長として、偉そうなことをするのではなく、隊を後ろから支える親しみやすい隊長を目指した。だから『隊長』という名前でも呼んでくれた人は19年隊で1人もいない。『ゆう』という名前でも呼んでくれたことに感謝します。

将来の道について

所属 法政大学 2年
氏名 杉本 宗里

私は、友人に誘われてこの JHP という団体に入ってカンボジアで活動することができました。ボランティアに参加するのも初めてで、何をするのか、何ができるのか全く分からず、成田空港を出発しました。スワイリエンでの 3 日間でみんなと直ぐに打ち解けることが出来たり、人間関係で少しづつかったりしたけど、大学ではこのような真剣に物事に取り組んだり、考えたりする機会がなかったので、本当に良い機会になりました。そこからプノンペンに戻ってからは時間が秒で過ぎてしまい、今からでもやり直したいくらいに



楽しい時間を過ごせました。フィールドワークでは班長を務めさせてもらい、責任を持つことの大変さ、様々な世代と関わることの難しさをフィールドワークで学ぶことができました。JICA 訪問や CCH（児童養護施設）での活動については、自分の人生の道で幅ができるような活動ができ、自分のやりたい事、その為にどのようにすれば良いのか、自分の将来について多くの事を、初めて、長く考える時間を持つことができました。JHP の活動隊に参加でき、本当に貴重な経験を沢山させてもらい、JHP のスタッフを初めてする仲間感謝しかありません。本当にありがとうございます。

自分の考えた世界との違い

所属 法政大学1年

氏名 チョウドリー サラ

わたしがカンボジアに行く前に考えていたカンボジアという国はポル・ポト政権下での大虐殺やフランスが保護国化し植民地のような形になった過去があって様々な国から支援を受けているような国だと思っていた。そして、今回活動隊に参加して、ブランコを建設したり、子ども達と日本の文化を共有したり、ソーラン節を教えてあげたりなど日頃行わないような事をこの10日間行ってきて、地方と都心の違いや子ども達の無邪気な笑顔をた



くさん見ることができてとてもいい経験になったとおもう。さらに、日本との食文化の違い、モノの扱い方やスクールが降っても傘も差さずに行動しているカンボジア人をみて驚いたりもしたが、自然と共存しながら生きているというのに圧巻されたなと思う。他国からの支援も受けている中でも、カンボジア政府も躍起になっていろんなアクションを起こそうとしているのをスタディーツアーできいてこれからのカンボジアがどうなっていくのが楽しみでもあるし、子ども達の教育の環境が今よりも良い方向に向かっていくのだろうなとも実感した。また機会があればカンボジアに出向いて子ども達に会いたいと思った。ほんとにいい経験になりこの10日幸せでした。ありがとうございました。

行ってよかったカンボジア

所属 法政大学1年
氏名 山森 菜々子

想像していた国とは全く違ったなあ、と言うのが率直な感想です。行く前は、かなりの発展途上国だと思っていたので、食べるものも住むところも、聴く曲までも、私たちとは全く違うんだろうなと考えていました。でも実際は、出てくるご飯は想像よりも美味しいし、ホテルはきれいだし、日本でも流行っている韓流スターの曲を子どもたちが合唱しているし、なんだか、同じ地球に住んでいるんだなと改めて実感しました。カンボジアだなあ！と1番感じたのは、マーケットです。売り物の魚が地面を泳いでいたり、生肉が吊るされていたり、カエルを焼いていたり、なんだか、日本ではあり得ないような光景が広がっていて、新鮮でした。写真を見返すだけで、その場の匂いが蘇ってきます。本当に臭かったです。でも本当に行けて良かったです！服やカバンは、いくら値切れるかが勝負だということを聞き、難しい顔をしたり、帰るふりをしたりして、ここならではの体験を楽しみました。10日間毎日新しいことだらけで、自分が更新されていくのがわかりました。これからもいろんなことに挑戦したいと思える、いい経験になりました。関わってくださったみんなに、感謝します。



カンボジアの子どもたちから学んだこと

所属 法政大学1年
氏名 西村 裕美

カンボジアの子どもたちの笑顔は、本当に眩しいという言葉がぴったりだった。完成したブランコを見ている時の笑顔、私たちのよさこいを見ている時の笑顔は、忘れられない。必要なものや楽しいことは身の回りであることが当たり前になっている日本の子どもたちからは見たことがない大きな笑顔だった気がする。今まで日本で生まれて良かった、幸せだと思っていたが、本当に幸せなのほどちらか分らないと感じた瞬間だった。それとは対照的に見ていて辛くなる光景もあった。キリングフィールドに行った際、物乞いをする子どもに出会った。こういうことがあるということは聞いていたが、こんなに小さな子どもがこんな悲しそうな目をするのかと、実際に見ると心が痛かった。日本でも今貧富の差という社会問題はあるが、こうして目に見える貧富の差を子どもたちから見ることで滅多にないため衝撃を受けた。今回こうして現地の子供たちから感じたことを通して私は、子どもの教育に携わりたいという夢への思いが強くなった。1人でも多くの子どもたちが教育を受け、自分の夢を持ってくれる日がきたらいいなと強く感じた10日間だった。来て実際に接したからわかったことが沢山あり、本当にいい経験だった。JHPのみなさんに感謝でいっぱいだ。



GIVE & GIVE

所属 立教大学3年
氏名 木村 綾乃

大学の講義でノーブリスオブリージュという持つ者は持たざる者に与える社会的責任と義務があるという欧州の道徳観を授業で学び、何も行動できずただ生きて日々を消化させていた自分を変えたい、まずはカンボジアでノーブリスオブリージュを果たし、見返りを求めずに自分を差し出せる訓練をしたいと思ったため JHP 体験ボランティアに応募した。このような想いのもとに始まったカンボジアでの10日間の日々は、想像以上に刺激的であり、充実していた。高校生から社会人まで普段交わることのないバックグラウンドも異なる人々と共に過ごせたこと自体が、私にとってカンボジア滞在の中で最も大きく、様々な考えや知識、感情、行動に触れることができた。その中でダメかも、もう無理かも、と気弱になる瞬間も勿論あったが、そんな時はいつでも隣には私の話を聞いてくれ、励まし、行動してくれる人がいた。そして JHP の仲間の他にもホテルを出たら、汚れのない強い光を放つ目で初対面の私に話しかけ、ハグやキスをしてくれる子どもたちもいた。大学ではできないような熱い話や共同生活を通して、自分を客観視しながら自分の核となる部分に触れることができ新しい自分との出会いもあった。最終日前日ノーブリスオブリージュは果たせたのか考える。ブランコ建築や子どもたちとの交流で確かに私と与えられたものはあった。しかし私と与えられたのは社会人をはじめとする人々の絶大な支えがあったためであり、私自身も持たざるものとされる人にその何倍も何倍も与えられた。この10日間で持つ者だから持たざる者に与える、という考え方自体に違和感を感じるようになった。そこにメリットはないのに私の話に付き合ってくれた友人や、大切な指輪をくれた子どもたちの姿を見て、持つ者、持たざる者関係なく、自分自身がそうありたい、そうしたいと思ったから行動するというシンプルな構図がしっくりきた。カンボジアの地にあったのは give&take ではなく give&give だと感じた。カンボジアでの日々は、日本で忙しなく生きていた私の目には写らなかったことで溢れており、今後の人生に繋がる1つの大きなポイントとなる気がする。カンボジアでの10日間を胸に今後も精進していきたい。



つなぐ

所属 立教大学2年
氏名 長島 純子

私はこのカンボジア体験ボランティアの志望動機に直接現地に行って、直接支援をしたい、と書いた。今回その夢が叶い、カンボジアに来ることができた。カンボジアに到着した時、これから始まるんだというワクワクとドキドキで心がいっぱいだった。この10日間は、本当に刺激的で、人生の中で一番濃かった10日間であったと思う。スワイリエンでのブランコ作りから始まり、みんなで汗を流しながら作業をして、カンボジアの子どもたち



とたくさん交流して、キラキラの笑顔をくれる子どもたちがとても印象的で、自分が支援をしに来たはずなのに、逆に子どもたちから勇気と元気をもらった。10日間過ごしていく中で、本当に私は隊のメンバーに助けられたなと強く思う。きっとみんながいなかったら自分は10日間やってこれなかったと思う。こんな自分を受け入れ、仲良くしてくれたみんなに本当に感謝しています。ありがとう。最後に、今回のカンボジア体験ボランティアを終えて、この10日間に1つ題名をつけるとしたら、私は「つなぐ」という題名にする。この10日間で、私は多くの人とつながり、たくさんの笑顔とつながり、カンボジアの文化とつながり、そこで経験した多くの葛藤や困難は自分の成長につながった。そして、自分がこの10日間の中で行った活動は、世界から見たら、小さくて、全ての人を助けられるものではないかもしれない、しかし、私は、この活動がカンボジアの小さな未来につながっているのなら、いいなと心から思う。そして、私はこの10日間のカンボジアで過ごした日々の中での学び、経験を、自分の将来に繋げたい。

身をもって経験したカンボジアでの当たり前

所属 立教大学2年
氏名 宮本 実佑

この、カンボジアで過ごした約10日間は、私の人生の中で一番、当たり前とはなにかを考えさせられる時間が多かったのではないかと思います。洗濯機、蛇口をひねれば出てくる飲める水、エアコンなど、日本で当たり前のように使っているものが、まだ普及していない地域も沢山あり、私たちの今の環境がいかに恵まれているのか、身をもって感じました。また、こどもたちとの交流において、児童養護施設を訪問させて頂いた際、車を降りるとすぐに、警戒心もなく目を輝かせてハグし、歓迎してくれて、日本では見られない光景を見ることができました。正直、児童養護施設と聞いて、心を閉ざして話をしてくれない子もいるのかなと行く前は思っていたのですが、全くそんなことはなく、他の小学校と同じように歓迎して話しかけにきてくれました。全ての経験を通して、頭で考えるだけでなく、実際に現地に行き、自分の目で見て経験することの大切さを強く感じました。大学生の夏休みのうちに、JHPのカンボジアボランティアに応募して、このように貴重な経験ができて、本当に良かったなと思います。



自分の糧

所属 立教大学1年

氏名 佐藤 花凛

今回のこのカンボジアでの10日間は間違いなく私の刺激になりました。毎日が今まで生きてきた中で経験したことのないようなことばかりでした。初めて口にしたクメール料理は、味の不慣れさでなかなか食べ進められなかったり、洗濯機がないから自分たちで手洗いしたり、虫やヤモリがいたるところにいたり。でも、それも全て10日経つと慣れたのです。「あ、自分強くなったな」とすごく実感しました。ブランコ建設・校舎塗装のボラン



ティアは、炎天下の中で大変な作業でしたが、チームワークと現地の多くの方々のおかげで手作業とは思えない立派なブランコができ、すごいなと思いました。私は中々ブランコの建設で力になることができなく、ただ立っていることも少なくありませんでした。自分から率先垂範していく大切さ、難しさを感じ、この自分の弱みをこれから改善していきたいと気がつくことができました。また子ども達との交流には本当に心が温まりました。会ったばかりなのに、無邪気にこっちに来て話しかけてくれてとても嬉しかったです。ただ、もっと自分が英語を話せたら、と思う瞬間が何度もありました。今までやろうやろうと思いついていかなかったことなので、今回は勉強するきっかけになりそうです。頑張ります。社会人の方々とも普段近くで接することが少ないため、毎日色々な話をしてくださったり、サポートしてくださったり、とても感謝しています。このボランティアに参加することができて本当に良かったです。JHPの皆様、同じ隊の皆さん、本当にありがとうございました。

10 日間で得たこと

所属 立教大学1年
氏名 棚木 はるか

私は、幼い頃から国連などの国際機関で働きたいと思っていました。しかし、海外に行ったこともなく、行動を起こすことができていなかったため、将来への第一歩にと、このプログラムに申し込みました。カンボジアに着くと、日本とは全く違うその雰囲気によって圧倒されました。そこからの10日間は、一瞬だったとは言い難いですが、本当に濃くて自分の人生の糧になるものだったと思います。ブランコ作りのスイリエンでは、昼間の炎天下での活動が身体にこたえたり、食事や入浴、洗濯など生活面でも苦労しました。この経験で、少し自分が自立できたのかなと思います。プノンペンでの活動のなかでは、JICAへの訪問がとても印象的でした。実際にそこで働いている方の生の声を聞くことができ、国際機関で働くという夢に近づけた気がしました。そして何より、子どもたちとの交流はとても刺激的でした。どの子どもも、何事にも一生懸命取り組んでいて、その姿を見て、こんなに純粋な子どもたちの支えになれるように、日本に帰って自分も頑張ろうと思いました。最後に、ここまで10日間カンボジアでやってこれたのは、とっても優しくておもしろい8月隊のみんなのおかげです。みんなに出会えて本当に良かったです。ありがとうございます！！



はじめの一步

所属 専修大学1年
氏名 荒木 はな

カンボジアを訪れる前も、もっと前の応募をする時にも、不安が大きかった今回の活動。渡航経験もなく、集団行動もコミュニケーションを取ることも苦手、体力もないことを自覚していたからです。実際にカンボジアで活動をして、ご飯をあまり食べられなかったり、体調を崩しかけたこともありましたが、参加を後悔したことは1度もありませんでした。第一には、たくさんの刺激を受けたことがあります。カンボジアで働く方やJHPスタッフのお話を聞いたり、十人十色な8月隊のみんなと話したことで、今まで諦めていたことや考えたこともなかったことを知ったり、もっと努力をしなければ、努力したい、と自然と強く思いました。また、ローカルスタッフの方や、子どもたちも、8月隊のみんなも、出会った人全員が本当に温かくて、たくさん笑った忘れられない時間を過ごせました。みんなが温かすぎて、そんな人たちに出会えたことが嬉しくて、キャパオーバーになって涙が零れたこともあったくらいです。日本に帰って自分の生活に戻っても、疎遠になりたくない、刺激をもらったり与えたりする関係がずっと続くといいと心から思います。1歩を踏み出して良かったです。また弱虫に戻ってしまったら、この10日間を思い出して頑張ります。本当にありがとうございました。お疲れ様でした。



10年ぶり2回目のカンボジア

所属 弘前大学1年
氏名 川嶋 由希香

私がカンボジアを訪れるのは、10年ぶり2回目である。今回の滞在を通じて、発展途上国と呼ばれる国での変化の早さとその中で変わらぬものを感じた。10年前、スワイリエンへは、メコン川を船で渡り、舗装されていない道路を何時間も車で走った。今ではつばさ橋もでき、舗装された道路がほとんどであった。懐かしさも感じないほど違う街に成長していた。学校建設が進んでいるようにカンボジア国内の社会も急激に変化している。この社会において、支援すべき課題も変化することを踏まえ、すべきことを考え続けなければならないと感じた。社会の変化を感じた一方で、カンボジアの子どもたちの笑顔や人懐っこさには変わらないものがあった。学校に来て、勉強し、友達と遊ぶ。こんなにも楽しそうに過ごす子どもたちを見て、学校教育の必要性を再確認した。今回のボランティアは通過点であり、今後この経験を踏まえて何ができるのか、必要なかを改めて考えるきっかけとなった。



自分自身を成長させるチャレンジ精神を大切に

所属 社会人
氏名 榊原 宏

出発前3つの目標を立てていました。

- ・初めてのボランティア活動を通じて素直に感じ取ること
- ・50代半ばを過ぎ一個人としてこれからどのように社会に貢献できるのかを考える機会とする
- ・日本とカンボジアの橋渡し役としてこれから出来ることを考える

現地での様々な体験を通じて想像していた以上に感じたことは、カンボジアの子どもたちの純粋な目は、我を忘れてブランコを作り込みに没頭させ、水の吸水や日焼け対策も忘れてしまうくらい感情が移入してしまいました。

「人間愛？」忘れかけていた感情を思い出させてくれた気がします。会社人生から個人が主体となる年代、素直にこれからやりたい事の一つとして感じ取ることができました。ここでの体験を通じて人の繋がりをさらに築いていきたいと思えます。

最後に・・・

常に好奇心を持ち自分を成長させようというチャレンジを忘れない生き方をしていきたいと思えます。今回のボランティア活動は私にこう教えてくれました。

今回お世話になりましたカンボジアの皆様、JHP関係者の皆様そして201908隊の皆様本当にありがとうございました。



フィールドワーク活動を通じて

所属 社会人
氏名 小又 利晴

カンボジアへの入国は、1992年8月に外国からカンボジアへの帰還民の支援として難民キャンプのボランティアが始まりました。その後1993年12月にダン・カオ小学校建設プロジェクトに参加させてもらい、個人旅行も含めて不定期ではありますが、27年程の変遷をみてくることができました。活動期間中は全ての事が有意義な時間でしたが、今回はJHPとしても初めての試みになるフィールドワークが印象的でした。私たちのグループはカンボジアの文化について、事前の準備と現地でのフィールドワークで調査しましたが、改めてカンボジアが辿った歴史と照らし合わせると興味深いものでした。カンボジアは今でこそ多くの外国から援助を受けていますが、過去には貿易で栄えた豊かな国で、近隣諸国に文化的影響を与えるほどの国でした。それがポル・ポト政権時代の極めて短期間の徹底的な破壊活動により惨憺たる現状になったことはカンボジア国民がとても悔しい思いをしていることと思います。今回のフィールドワークによってJHPが掲げる理念が正しい方向に向かっていることも再認識することができて、この様な貴重な経験を次の若い人たちに少しでも触れてもらいたいと心から思います。



2 回目のカンボジア

所属 社会人
氏名 菊池 透

前回は社会人のみでカンボジアのボランティア (JAM 静岡) でしたが、今回は学生たちと一緒に活動で、始めは上手く学生たちと交流できるか不安な面が多くありましたが、最後はみんなで楽しく終わることができました。ボランティア活動の前半のブランコ作りにおいては、前回の経験はあったものの細かい作業方法まで覚えておらず、ローカルスタッフやサポートメンバーに聞きながらの作業となりました。初めてに近いところもあり学生たちと協力しながら 1 つの目標を作り上げることで一致団結することができよい経験となりました。ブランコ製作後子どもたちが喜んで遊ぶ姿が見れて嬉しく思います。プノンペンに戻り、JHP カンボジア事務所やローカルスタッフより現在のカンボジアの現状を聞き自分たちや日本という国がもっとカンボジアへできることをディスカッションし今後のカンボジアの役に立てれば嬉しく思えます。今回初の試みのフィールドワークにおいては、それぞれテーマに則り現地の声を見たり聞いたりしているなかで親世代の識字率や英語の理解が少ない現実を知りました。カンボジアの教育関係で少しでも多くのカンボジアの人々が学んでいます、まだまだ少なく親世代の意識改革も必要だと思います。我々のできることは少ないですが、少しでも意見をいいスタッフへ伝えていけたらと思います。



最後に、カンボジアのボランティアに参加させていただきまだ支援の手を必要としていますが、少しでも自分たちが協力していき日本とカンボジアの和を繋げていきたいと思いません。今回の活動に参加させていただき誠にありがとうございました。

たくさんの「ありがとう」に「ありがとう」

所属 社会人
氏名 村松 菜緒子

今回、社会人枠で参加させていただいた村松です。今回はご縁をいただき二度目の再訪、懐かしい再会も楽しみでしたが、まずは自分がこのツアーで大人としての“役割”を保てるかでもメンバーと打ち解けられるか、そんな課題を持って参加しました。プノンペンに降り立つと前回感じた土砂埃の匂いはず、滞在中の料理も特有の匂いがほぼ無かったことでカンボジアの変化の速さをさっそく体感しましたが、そんな中でもカンボジアの



人達の笑顔や優しさは変わらず、そんな風土に触れたせいか、メンバーのうちに秘めた優しさや気遣いも自然と引き出っていて、内外ともに、またたくさんの「ありがとう」に出会うことができました。ここに書き切れないのがとても残念ですが、たくさんの荷物をみんな快く持ってくれたこと、ソーラン節を教えてもらったこと、みんなと踊れたこと「ナオさん」と気さくに話しかけてもらえたこと たまの大人同士の会話に心を和ませてもらったこと、ご支援いただいた食事に身体がホッとしたこと、みんなの頑張っている姿が見れたこと、作業が終わった後のみんなの笑顔が見れたこと、みんながさりげなく「ありがとう」「オーケン」と口にしたときの素敵な表情に出会えたこと、こうした「ありがとう」に出会えること、体感できることの素晴らしさは、何物にも代えられません。ここで感じた気持ちを日本でも忘れず、またいつかたくさんの「ありがとう」に出会えるべく、次へと繋げていけたらと思います。

ありがとうございました！ អរគុណច្រើន!

カンボジア ボランティアの集大成

所属 活動サポーター

氏名 鈴木 直志

既に 4 回目のカンボジアでのボランティア活動でした。今回は、活動サポートとしての参加となり、事前研修にてブランコ造りの説明を行い、現地スワイリエンにあるルッセイプレイ小学校でブランコ造りの指導を行ってきました。

毎回、設置する場所の状況が異なり地質、形状等で穴の掘り方、穴の大きさ、穴の位置も現地で判断しなければなりません。更にブランコの部品チェック、工具の有無また工具の摩耗状況等の確認も重要な一つとなります。参加者全員は、事前説明のみでブランコを造ることが初めての為、作業の一つ一つを説明しながら作業を進めました。

ブランコ造りの期間は2日間と決まっている為、JHP スタッフと時間配分や作業分担を共に指示し、全員で協力しながらブランコ造りを行いました。私自身全員に色々な作業を体験して頂きたいという思いがあり、なかなかうまく作業が進まなかったことを反省しています。電気ドリルも女子学生が交代で行って頂き、作業中の安全面を考慮しながらの共同での作業となりました。更に作業中、発電機のトラブルで穴あけ作業が出来なく中断する事もありますが、なんとか予定通り完成出来たのは参加者また現地スタッフのおかげと思っています。ありがとうございました。

翌日はブランコの贈呈式を行い、待ち望んでいた子どもたちはブランコで思う存分遊んでいました。この光景はいつ見てもブランコを造った人しか味わえない最高の思い出です。

その他としては、プレイトロー小学校にて学校贈呈式に全員で参加し、一致団結したソーラン節を披露することが出来ました。また、今回初の試みだった4グループによるフィールドワークでした。事前にテーマを選定して行く場所を決めそのテーマに関する内容を自らの足で調査を行うことです。初めて見る事や行ったことのない場所での調査は、新たなチームワークの団結や現地の人達との交流が出来たと思います。

今まで3回のJHP主催のカンボジア体験ボランティアへ参加させて頂き本当にありがとうございます。自分の人生で貴重な体験が出来た4年間でした。またカンボジアも身近に感じフェイスブックでも知り合いが増えて今後も情報交換をして人生を楽しんで行きます。これから私自身の活動は、日本でバックアップする形で協力出来たらいいな！と思います。今回のカンボジア ボランティアが集大成となる 1908 隊への参加でした。

1908 隊メンバー、JHP スタッフ、運転手の皆様 11 日間いろいろとありがとう。

オーケン!!



2019隊 活動サポーターとして参加して

所属 活動サポーター

氏名 北村 巖

三年連続でボランティアに参加をさせて頂きましたが、これまでと異なり活動サポーターとしての活動となりました。

第2回目の勉強会に際して、ブランコ建設の工程を写真入りで作成し、学生の皆さんにも一目で解ってもらうように作成したつもりですが、実際に現地で作業を始めると疑心暗鬼な部分もあり、些細な点については作業を行いながらの説明となり、難しく感じられました。特に一人でも多くの方に電動ドリル等の工具を使いながら体験させるためローテー



ションをしようとしたところですが、十分な体制を整える事が出来なかった様に思います。

また、今回のブランコ建設の際に、支柱を立てる際に栗石と砂利を入れある程度固定した後、砂を入れた後に水を注水し、支柱を固定する必要があるのですが、現地スタッフから砂を少しで水は入れずに、コンクリートを緩く練り入れることになりましたが、この工程の重要性を十分に説明することができず、自分の不甲斐なさを感じた次第です。

ブランコ建設については、諸事情もあり前工程である木材のヤスリ掛け、防腐剤の処理及びチェーン繫等の工程がなかったため、やはり完成後の達成感及び感動が以前より少なかった様に感じられました。

今回も社会人の参加が活動サポーターを含めて数名の参加がありましたが、社会人の応募及び面接の際に、社会人として参加要件等を明確にしておく必要があるのではないのでしょうか。学生達にもっと考えさせる力を発揮させ、そのサポートに徹するような人材に絞ることも必要ではないかと感じました。

2019隊の活動も怪我もなく、無事に全員帰国する事が出来ました。このボランティアの企画、運営にあたって頂いた本部及び現地スタッフの皆さんには、本当に感謝です。

この年になり若者達とも色々な交流・意見交換ができる機会をいただいた事に、本当に感謝申し上げます。この3年間にご一緒した学生達の今後の成長を見ることも楽しみであり、また機会があればカンボジアを訪問し、同国の経済発展やCCH（児童養護施設）の子ども達との交流を深め、成長を見る事が出来ればと思っています。

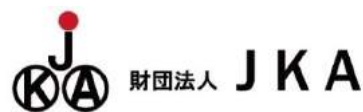
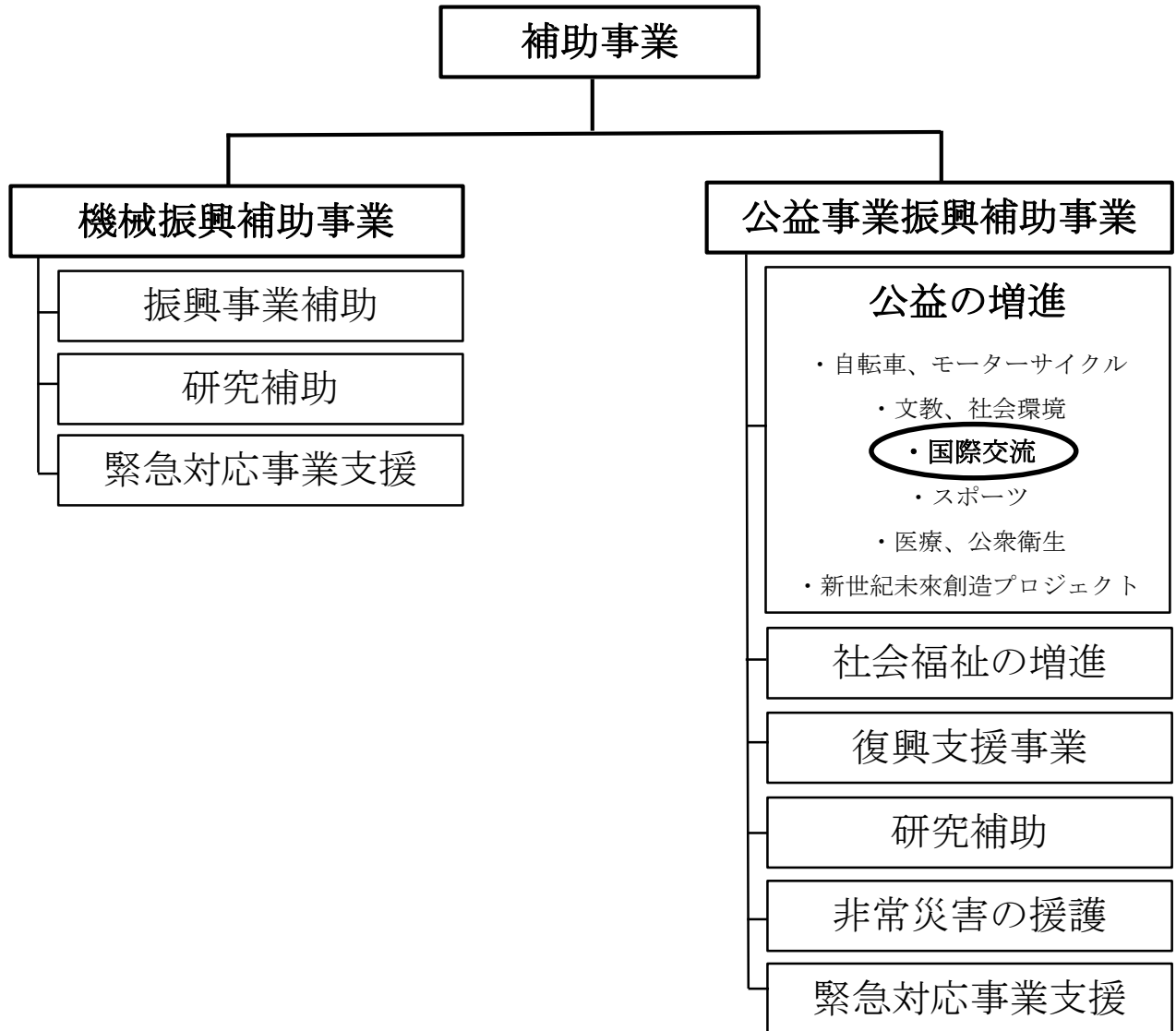
今後も「JHP・学校をつくる会」の発展にお役に立てることがあれば、声を掛けていただければ幸いです。

7. 活動への支援団体

公益財団法人 J K A（競輪とオートレースの振興法人）

補助事業の概略

補助事業とは、『機械振興補助事業』と『公益事業振興補助事業』に分かれています。
JHPの活動は国際事業分野に該当するため、下図の公益事業振興補助事業内、公益増進区分の国際交流推進事業、“競輪補助事業”より活動へのご支援をいただきました。





できることからはじめよう!!



〒108-0014 東京都港区芝 5-26-16 読売理工学院ビル 6F
TEL 03-6435-0812 FAX 03-3435-0813
ホームページ www.jhp.or.jp E-Mail tokyo-office@jhp.or.jp